

# 19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動

齋藤元子

## 1. はじめに

19世紀のアメリカにおいて、キリスト教プロテスタント各教派に共通してみられた顕著な活動は、海外伝道のために多くの宣教師を送り出したことである。特に世紀後半には女性がその大半を占めた。日本へも複数の教派から多くの女性宣教師が派遣され、布教活動に加え女子教育に積極的に関わった。現在女子ミッションスクールと呼ばれている学校のほとんどは、当時来日したアメリカ人女性宣教師によって創立されたものである。

海外伝道が女性中心に担われるようになった理由は、それぞれの教派の中に組織された女性海外伝道協会の力による。女性海外伝道協会は、女性信者の自発的な努力によって生まれ<sup>1)</sup>、その運動力によって多くの女性を宣教師として海外に派遣することを可能にした。

女性海外伝道運動はプロテスタント教会内における女性運動という見方に止まらず、アメリカのフェミニズムの流れの中に位置付けられる運動として注目されている。本稿では、先行研究に依拠しながら<sup>2)</sup>、19世紀後半のアメリカにおける女性海外伝道協会成立の経緯を、その背景にある当時の女性<sup>3)</sup>の生活環境や教会との関係などを踏まえて検証したい。

## 2. 女性の領域 (woman's sphere) と教会

19世紀後半のアメリカは資本主義経済が発展を遂げ、北部の都市では職住分離が進んでいた。夫は家庭の外で働き、妻は家庭で家事と育児に専念するというのが中産階級の典型的な生活形態であった。夫婦の職分が明確化されたことにより、その活動空間もおのずと一線が引かれた。家庭は女性の領域 (woman's sphere) として、男性の職場と同等の価値を与えられたが、それは一方で女

性を家庭に閉じ込めることをも意味した。

中産階級にとっての理想の家庭とは、キリスト教信仰に支えられたクリスチャンホームである。キリスト教会は、家庭の神聖を強調し、女性の領域を賛美した。世俗の垢にまみれて帰宅する夫を暖かく迎え入れる場として、子供を信仰の厚い善良な市民に育て上げる場として、家庭がいかに大切であるかを説いた。女性が家庭においてクリスチャンの純粋性を維持することは、夫や子供を善導することであり、それは延いては社会を浄化することにつながる。つまり女性は家庭という狭い領域に閉じ込められているのではなく、夫や子供を媒介にして社会変革に参加しているのだ、というレトリックが存在する。

教会は女性にとって家庭以外に許された活動空間であった。言い換えれば、教会活動を通して、女性は社会との関わりをもつことができた。教会においてバザーを開き収益を孤児院に贈る、日曜学校<sup>4)</sup>で子供に聖書の話をするといった活動は、キリスト教の博愛精神を実践したささやかな社会との接触であり、女性の領域を逸脱するものではなかった。なかでも、日曜学校は女性が教会の中でリーダーシップを取れる数少ない活動の場であった。当時男性は資本主義経済が渦巻く中、世俗的な成功に忙殺されて教会から足が遠く傾向にあり (有賀 1988 : 43)、礼拝出席者の多くは女性であった。しかし牧師が男性であったことは言うまでもなく<sup>5)</sup>、教会の役員もほとんど男性によって占められていた。一方日曜学校は、監督者、クラスリーダー、世話係などとして女性が活躍し、教会はそのことをむしろ奨励していた (Keller 1980 : 83)。

当初は一教会の中で完結していた女性の活動であったが、しだいに教会間のネットワークを作るといった形で、外への広がりを持ちはじめ、より社会性を帯びた活動へと発展して行く。その目的は貧困女性や孤児の救済が主で<sup>6)</sup>、家庭を護ると

いう女性の領域の概念に当てはまるものであった。しかし、活動自体はすでに女性の領域が、家庭という私的空間を脱し、教会を通じて社会という公的空間へ広がりつつあった(小檜山 1992: 36)。当時の女性が、教会活動のために時間を捻出するのは、さほど困難ではなかったように思われる。19世紀のアメリカは白人女性の出産率の低下が著しく、一家族あたりの平均子供数は、世紀初頭の7人から世紀末には3.6人へと減少した(有賀 1988: 49)<sup>7)</sup>。また、熟練した技能をもたない移民女性を家事労働に雇う中産階級が増加し、ガスライト、水道、調理ストーブなどの開発もみられた(Hill 1985: 38)。これらのことにより女性は以前よりも家事や育児にかかる時間が軽減され、その分の時間を教会活動に費やすことができたと考えられる。

### 3. 南北戦争と女性

教会を拠点とした女性の活動は公的な性格を帯びてきたものの、一組織の地理的な広がりには、大規模なものでも一つの都市域に止まっており、ほとんどが近隣地域の教会間のネットワークに過ぎなかった。この状況に大きな変革をもたらしたのが南北戦争である。南北戦争(1861-65)は、女性の活動を広範囲にネットワーク化する契機となった。

教会は奴隷解放のための戦争を道徳的観点から支持した<sup>8)</sup>。そして銃後の守りとしての女性の役割の重要性を説き、コミュニティの環境保全や志願兵の家族支援などを女性が協力して行うことを奨励した。教派が発行する女性向け雑誌は、短編小説や詩などを通じ、女性がどのような形で戦争に協力できるかを、ロールモデルを用いて具体的に示した<sup>9)</sup>。

戦場での医療活動をサポートするために衛生委員会(The Sanitary Commission)が組織されると、教会はその活動を全面的に女性に委ねた。戦場へ送る医療物資を調達する資金を得るために、女性は協力の輪を広げていった。「衛生フェア」と銘打ったイベントが女性により各地で企画開催され成功を収めた。あるフェアではギャンブルやダンスがプログラムに組み込まれていたため教会から批判を受ける一幕もあったが、女性による衛生委員会の運営能力を教会は十分に評価した(Endres

1995: 93)。このような活動を通じて、女性は資金調達、事務処理、広報活動などの方法を学び、組織の形成手腕を身につけていったのである。

### 4. 海外女性伝道協会の成立

アメリカのプロテスタント教会による海外伝道は、1810年会衆派(Congregational)の有志により設立されたアメリカ海外伝道局(American Board of Commissioners for Foreign Missions)が5人の宣教師をインドに送ったことに始まる。その後、バプテスト派(Baptist)、長老派(Presbyterian)、オランダ改革派(Dutch Reformed)、聖公会(Episcopal)、メソジスト監督派(Methodist Episcopal)などの主要教派が次々に海外伝道のための特別組織を結成し、宣教師の派遣を開始した。しかしこれらの組織は男性宣教師の派遣を目的としたものであり、女性は宣教師の妻という形でのみ同行が許された。

宣教師の妻としてアジア、アフリカに渡った女性は、現地の女性の生活を目の当たりにし、その虐げられた姿に強い衝撃を受けた。そして異教徒の中でもまず女性がキリスト教の福音によって救われなければならないと痛感したのである。しかし、現地の因習が障害となって男性の宣教師が女性に近づくことは困難を極めた。例えばインドにおいては、ある程度の生活水準にある家庭の女性は、ゼナーナ(zenana)と呼ばれる女性専用の生活空間に閉じ込められ、そこへ入ることのできる男性は夫とごく近い親類のみで、外国からやって来た男性の立ち入りなど論外であった。また宣教師の妻は、異国で夫を支え子供を育てながらクリスチャンホームを維持してゆくこと<sup>10)</sup>に大半のエネルギーを消費され、自ら女性への伝道活動に乗り出して行くゆとりはほとんどなかった。なかには強い使命感から伝道を試みる者もいたが、健康を害する結果となり、伝道地からの報告書に宣教師の妻の名前が載る場合はそのほとんどが彼女の死を告げる時である(Welter 1980: 116)と言われたほどである。

このような状況のなかから、異教女性への伝道に専従できる独身女性宣教師の派遣が不可欠との認識が生まれた。妻たちはアメリカ本国への報告書のなかでその派遣を要請し、また休暇で一時的に帰国した際には、率先して各地の教会でその必要性

を説いた。これに応える形で1861年1月ニューヨーク在住のサラ・ドリマーズという女性を中心となって「女性一致海外伝道協会」(Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands)が結成され、アメリカで初めての女性による海外伝道協会が誕生した。この協会は教派の枠にとらわれない超教派組織として発足し、役職も主要教派に均等に割り当てた。同年11月には早くも最初の女性宣教師がビルマに派遣された。また発足後直ちに機関誌『Missionary Crumbs』を発行して協会設立の意義や活動目的を公にし広く会員を募った。機関誌は、以後アメリカ本国で資金調達や広報などのホームベース活動に従事する会員と海外で伝道活動に従事する宣教師とのコミュニケーションの媒介として、重要な意味をもつことになる。ちなみに同協会フィラデルフィア支部長に就任したサラ・ジョセフ・ヘイルは当時アメリカ最大の発行部数を誇っていた女性誌『Godey's Lady's Book』の編集長であった。女性読者の心をとらえる編集術や出版物のもつ影響力の大きさを十分に心得ていたヘイルが、『Missionary Crumbs』の編集に助言を与えていたことは想像できる。この頃すでにアメリカ生まれの白人女性の識字率はほぼ100%に達していた(Hill 1985: 43)。これは、前述したように、機関誌が本国と伝道地とのコミュニケーション手段として機能しうることを裏付ける事実である。女性一致海外伝道協会は、結成された同年に南北戦争が勃発したという不運と教派間の足並みが揃わなかったという事情がからんで、大きな組織に発展することはなかった。しかし、南北戦争後に誕生する教派別の女性海外伝道協会に手本を示した功績は大きい。

南北戦争中、教会を基点とした衛生委員会などの活動を通じて組織運営のノウハウを習得した女性は、戦争が終結すると、経験を生かせる新たな活動の対象を模索し始めた。そして、異教地の女性を救済するために女性宣教師を派遣するという運動に多くの女性が共鳴するのである。異教の虐げられた女性を救おうとする行為は、南北戦争で傷ついた兵士を援助した行為と同様に、家庭において夫や子供を助ける妻・母の役割の延長線上にあり、それは女性の領域の活動と見なし得た。このことが多くの女性を抵抗なく運動に引き込んだ要因と言える。また、ゼナーナなどに閉じ込めら

れた異教女性の姿を想像すると、女性の領域に閉じ込められている自らの姿と重なり、連帯意識を呼び起こしたことも事実だろう。

女性一致海外伝道協会の経験から、教派別の方がより良い活動が展開できるとの判断に立ち、各教派ごとに女性が立ち上がった。1868年の会衆派を皮切りに主要教派は順次個別の女性海外伝道協会(以下女性協会と呼ぶ)を結成した。男性宣教師の派遣を目的として既に各教派内に設立されていた海外伝道協会(女性協会に対してこちらを親協会と呼ぶ)は、独身女性宣教師の必要性を十分に認識し、その派遣に異存はなかった。しかし、女性協会はあくまで親協会の下部組織であり、その指揮の下に活動することを主張して譲らなかつた。その理由は、女性協会が独自の活動を展開すると、それまで親協会にもたらされていた活動資金としての献金が女性協会に流れてしまうことを恐れたからである。

親協会との協議の結果、女性協会と親協会との関係は大きく分けて従属、協力、独立の3タイプが発生した(戸田 1987: 50)。従属タイプに属するのは聖公会、オランダ改革派などで、女性協会は独立した法人組織にはなっておらず、親協会の下で資金調達のみに関わった。協力タイプに属するのは会衆派、長老派、バプテスト派で、女性協会は個別の法人となり、宣教師採用や資金管理など一部自己決定権を有した。独立タイプと呼び得るのはメソジスト監督派のみであった。しかしその独立も、女性協会は礼拝やその他のいかなる教会集会の場においても献金や寄付を求めることは許されず、独自に資金源を開拓することを確約させられた上でのものであった。

女性協会の活動に参加するには2つの道があった。1つはアメリカ本国でのホームベース活動、もう1つは海外での伝道活動である。ホームベース活動は、資金の管理調達、宣教師の採用人事、機関誌発行<sup>11)</sup>などである。これらの実務活動は大都市の一部の既婚女性に多くを依存していたが、アメリカ各地に住む多数の女性が会員として会費や献金を納める形で、金銭的支援をした。女性組織であるがゆえに大口の寄付は期待できず、できるだけ沢山の会員や献金者を確保する必要があった。そのために会費や機関誌の定期購読料を安く押さえた<sup>12)</sup>。また子供による少額の献金も貴重であり、機関誌の中に子供のためのページを設けて

海外伝道に対する興味を促した<sup>13)</sup>。

女性協会は、親協会との摩擦を繰り返しながらも、着実に成長していった。教派別女性協会が誕生して約20年後の1890年までに、34の組織から926名の女性宣教師が派遣された(戸田 1987: 41)。また1893年までに約150万ドルの資金が集められ、海外伝道中のアメリカ人宣教師に占める女性の割合は60%を越していた(Welter 1980: 119)。親協会は徐々に女性協会の集金能力の高さを認め、教会の公の席上で寄付を募ることを禁じたメソジスト監督派も、礼拝後に女性協会のメンバーが献金を集めるのを認めるようになった(keller 1980: 91)。19世紀末までに女性海外伝道協会に参加した女性の数は50万人とも60万人とも言われている。メソジスト監督派単独でも15万1千人の会員を擁し、この数字は教派中最大のものであるのみならず、当時のアメリカにおいて最大の女性組織でもあった(Hill 1985: 195)<sup>14)</sup>。

## 5. 女性宣教師の誕生

女性海外伝道協会により宣教師に採用された女性は教師経験のある者が多かった。19世紀は女性の領域から導き出される思想によって、女子教育の重要性が叫ばれた時代だった。つまり家庭という女性の領域において、子供を立派な市民に育て上げるためには、母親は知的でなければならないというものである。フィーメール・セミナリーあるいはフィーメール・アカデミーと呼ばれる女子中等教育機関が数多く設立され、家政と宗教に重点をおいた教育がなされた。また当時は公立学校制度の普及から教師の需要が高まり、人員不足が生じていた。女性教師は安価で雇えることから重宝がられ、フィーメール・セミナリー、フィーメール・アカデミー出身の教師が多く生まれた。例えば、1837年に創立されたマウントホリヨーク・セミナリーでは、開校後40年間は卒業生の70%が初中等教育機関の教師になっていた(Simmons 1976: 123)。女性教師の給料は男性の半分以下であったが、1860年マサチューセッツ州では初中等教育機関の教師の5分の4は女性だった。ニューイングランドでは1820年から60年にかけて女性の4人に1人が教師を経験していた(有賀 1988: 51)。また1850年初頭ペンシル

ベニア州の公立小学校では81人の男性教師に対して女性教師は646人であった(Simmons 1976: 117)。つまり教師は中産階級の独身女性にとって典型的な職業だったのである。

最も教師が不足していた西部開拓地に、独身女性が教師として一人で赴任して行くこともまれではなかった。海外へ宣教師となって渡ることは、その延長として捉えられたとしても不思議ではない。給料の面を比較すると、日本へ派遣された女性宣教師の年間給与は六百ドル、男性宣教師は八百ドルで25%ほど安かった(小檜山 1992: 142)が、女性教師が男性の半分以下であったのを考えると割はよかった。宣教師に志願することは、堅固な信仰心に基づいているのは言うまでもないが、職業としての選択という見方もできる。

伝道地においても、女性宣教師は教師経験を生かし女子教育に積極的に取り組んだ。伝道と教育は個別のものではなく、教育を通しての伝道を実践しようとしたのである。キリスト教を教育することは、キリスト教文化の押し付けあるいはアメリカナイズという図式を考えがえがちであるが、必ずしもそのような一方的なものではなかった。言葉を例にとると、宣教師は着任後しばらくの期間は、現地語の習得に専念することが義務づけられていた(小檜山 1992: 144)。教育の場においても、母国語の読み書きが最優先され、次いで聖書と自国の地理・歴史が教授された(Keller 1980: 90)。現地の文化を尊重することも念頭に置かれた。中国に派遣された女性宣教師たちは、ホームベースから現地の子供たちへのクリスマス・プレゼントとして金髪の人形が贈られて来た時、夜を徹して全ての人形に黒髪のかつらをつけた(Welter 1980: 124)というようなエピソードもその意識の表れだろう。

19世紀の終わりには42の団体から派遣された1200人以上の女性宣教師が、世界各地で異教女性への伝道に携わっていた(戸田 1987: 41)。女性宣教師は志願の際に、その職を生涯の仕事とする心積もりが期待され、少なくとも5年は続けて勤務することが要求された(小檜山 1992: 144)。10年に一度程の割合で一年間の帰国休暇が与えられたが<sup>15)</sup>、その生涯を伝道地で終えた者も少なくなかった。

## 6. おわりに

19世紀後半のアメリカに起こった女性海外伝道運動は、女性の領域を打破するのではなく、拡大することによって花開いた運動である。キリスト教の福音により虐げられた異教女性を救済しようとしたこの運動は、家庭という女性の領域の中に充満していたアメリカ人女性のエネルギーをも救済するものでもあった。女性海外伝道協会の設立を認め、女性が自らの能力を生かしリーダーシップを発揮できる場を与えたという点において、教会の姿勢は高く評価できる。だがその一方で、牧師への登用など教会機構における女性の地位の問題を棚上げにし、教会は女性を従来の領域に止めおいたことも否めない事実である。

女性海外伝道運動は20世紀まで継続され、1915年までに動員された女性の数は300万人以上にのぼり(Hill 1981: 149)、その伝道地はアジア、アフリカにとどまらず、南米、ヨーロッパのカトリック、ギリシャ正教国にまで及んだ。この19世紀最大の女性運動は、始めにも述べたように、プロテスタント教会内の女性運動であったのみならず、フェミニズムの流れの中に位置付けられる運動として目を向けられるようになってきた。しかし、さらにより広い分野からの研究の余地が残されていると思う。例えば、当時の女性向け小説に女性宣教師がしばしば登場したことや伝道地の世界的な広がり、ホームベースの組織の緻密さなどは、文学、地理学などからのアプローチの可能性を示唆している。

### 注

- 1) 女性海外伝道協会に類する活動は、アメリカより以前にイギリスで誕生した。しかしアメリカによる活動が展開されると、宣教師数、資金力ともにイギリスをすぐに追い越した。
- 2) 本稿は、Hill (1985) と小檜山 (1992) による先行研究に依拠する点が多い。
- 3) 女性海外伝道協会の会員ならびに海外派遣された宣教師は、いずれもアメリカ北部の中流白人女性であった。したがって本稿で論じる女性は、特に断らない限り、アメリカ北部の中流白人女性を意味する。
- 4) 日曜学校とは、教会で日曜日に行われる子供のための礼拝。牧師や大人の教会員が教師となって聖書の

話などをする。

- 5) プロテスタントの聖職者である牧師に女性を登用するなど教会の男女平等が公式に表明されたのは、アメリカの主要プロテスタント教派においては1950年代以降になってからである。
- 6) 例えば「ニューヨーク市貧民婦人伝道会」「ニューヨーク孤児収容所」「ボストン女性教育会」「ボストン女性避難所」など。(小檜山1992: 36)
- 7) 白人女性の出産率の低下は、夫婦が性関係において同等の力を有していた証拠と言え、家庭という女性の領域において、妻の権威が認められていたことを示すものである。
- 8) 同一教派であっても、北部と南部の教会では戦争に対する立場は異なった。例えば、主要教派の一つであるメソジスト監督派では、奴隷制廃止論をめぐって北部と南部の意見が対立し、1845年に分裂。1939年に合同されるまで、異なる教派として活動した。
- 9) メソジスト監督派(北部)により発行された女性向け雑誌『Ladies' Repository』は、南北戦争中、教派の垣根を越えて広く北部の女性を読者に得、商業ベースの雑誌に伍して女性雑誌部門で全米3位の発行部数をもった。
- 10) 伝道を成功させる一要素として、クリスチャンホームの見本を異教徒に示すことが重要視された。それはキリスト教信仰に基づく規律ある家庭といった精神面のみならず、清潔な室内、整った家具、きれいな窓辺のカーテンといった極めて物質的な規範を示すことにより、それに対する憧れからキリスト教への関心を呼び起こそうというねらいがあった。そのために宣教師は独身ではなく既婚者が望まれた。
- 11) 女性一致海外伝道協会の例にならい、各女性協会はそろって発足直後に機関誌の発行を開始した。主要機関誌名は以下の通り。  
会衆派『Life and Light』、長老派『Woman's Work for Woman』、メソジスト監督派『Heathen Woman's Friend』、バプテスト派『Helping Hand』、聖公会『Spirit of Missionaries』
- 12) 例えば、メソジスト監督派女性協会の年会費は1ドル、同協会機関誌『Heathen Woman's Friend』の年間購読料は30セントであった(Keller1980: 92)。
- 13) 伝道地の民話や遊びなどを紹介。宣教師は伝道地での活動状況をホームベースに報告する際、伝道地に対する理解を会員に促すために、その国の歴史、地理、生活習慣、女性や子供の様子などをレポートすることが求められた。機関誌は、協会活動の実態

を会員に伝える役割と同時に、海外についての知識を提供する啓蒙的役割をも持っていた。

- 14) 女性海外伝道協会とともに19世紀後半のアメリカを代表する女性組織に女性キリスト教禁酒同盟(1874年結成)が挙げられるが、その会員数は約15万人であった。したがって一教派単独でその数を凌いだことになる。
- 15) 帰国中、各地の教会において伝道地での活動報告を求められるなど、完全休暇とは言い難いものであった。

#### 文献

有賀夏紀1988.『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房.

生駒孝彰1994.『神々のフェミニズム』荒地出版社.

小檜山ルイ1989. 異教徒に捧げる祈り——宣教師というヒロインたち. アメリカ研究23: 39-61.

小檜山ルイ1992.『アメリカ婦人宣教師——来日の背景とその影響——』東京大学出版会.

スミス, ペイジ著, 東浦めい訳1987.『アメリカ史のなかの女性』研究社出版. Smith, Page. 1970. *Daughters of the Promised Land: Women in American History*. Boston: Little, Brown and Company.

戸田徹子1987. アメリカにおける婦人外国伝道協会の成立. アメリカ史研究10: 40-55.

外村民彦1996.『キリスト教を知る事典』教文館.

野村達朗1989.『フロンティアと摩天楼』講談社.

安武秀岳1988.『大陸国家の夢』講談社.

Endres, Kathleen L.1995. A Voice for the Christian Family: the Methodist Episcopal Ladies' Repository in the Civil War. *Methodist History* 33-2: 84-97.

Hill, Patricia R. 1981. Heathen Women's Friends: The Role of Methodist Episcopal Women in the Women's Foreign Mission Movement, 1869-1915. *Methodist History* 19-3: 146-154.

Hill, Patricia R. 1985. *The World Household, The American Woman's Foreign Mission Movement and Cultural Transformation, 1870-1920*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Keller, Rosemary Skinner 1980. Creating a Sphere for Women in the Church: How Consequential an Accommodation? *Methodist History* 18-2: 83-94.

Simmons, Adele 1976. Education and Ideology in Nineteenth-Century America: The Response of Educational Institutions to the Changing Role of Women. In

*Liberating Women's History*. ed. Berenice A. Carroll, 115-126. Chicago: University of Illinois Press.

Welter, Barbara 1980. She Hath Done What She Could: Protestant Women's Missionary Careers in Nineteenth-Century America. In *Women in American Religion*. ed. Janet W. James, 111-125. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Widmann, Ruth Dunn 1987. "Lost in the Immensity of God": a Pre-Civil War Methodist Woman's Experience of the Presence and Power of God. *Methodist History* 25-3: 164-175.